

ここ数年、韓国と中国がずいぶん身近に感じられるようになった。テレビのニュースや番組なども、これら二ヶ国の話題があれば、以前にないほど興味を持って見ている。その理由は、それぞれの国のポーランド学科の教員や学生との交流が一挙に深まったからだ。二〇〇四年の世界ポーランド学会議で、韓国外大のポーランド文学研究者Cheong Byung Kwon教授に出会うまで、学会でも韓国や中国の人はほとんど見かけなかった。実を言うと、九〇年代の半ば、「国際ポーランド語ポーランド文化教育者連盟BASTO」という組織を立ち上げる際、発起人の一人だった私は、韓国、中国の（それぞれ一つしかない）ポーランド学科にも手紙を書いて参加を呼びかけたが、反応はまったくなかった。

それが今やすっかり様変わりして、特に韓国とは頻繁に連絡を取り合い、往来している。韓国外大に講義をしに行くついでにポーランド語専攻の学生も連れて行って、韓国人学生の家にホームステイをさせてもらったり、逆に韓国の学生が来日してホームステイしながら、ポーランド語国家検定試験を日本人と一緒に東京で受けたりする。昨年には総合文化研究所を借りて、初の「日韓中ポーランド学科会議」を催した。今年六月には北京外大でこの会議をする。私にとっては初の中国旅行である。

韓国や中国の人々とポーランド語で話をし、旅行をし、一緒に仕事をするには独特な痛快感がある。三国間の歴史的・政治的な問題も、この「中立語」で話し合うことによって、より克服しやすいように思えるのは錯覚だろうか。加えて、自分たちはそれぞれの国で少数派であり、開拓者であるという、一種共通する思いから来る連帯感もある。北京のYiljun、Wu Lanといったポーランド文学研究者たちから、文化大革命の迫害について、あるいはポーランドのことを学ぶために経験した苦労について聞く話は凄まじいことばかりであるし、韓国とポーランド間にまだ国交がない時代にベルリンでポーランド語を学び、やがてソウルのポーランド学科を創設したCheong教授の回顧談も驚くべきものである。彼らはすでに退職年齢に達しつつあるが、ソウルでも北京でもその教え子たちが立派に育ち、学科を運営している。東京では結局それができなかった。悔やまれるし、情けない。